

成長の源泉は人材育成 多様な連携で次世代の技術開発に取り組む

装飾したり、新しい機能を付与したりする目的で素材の表面に金属の薄い皮膜を施す技術、めっき加工。自動車、家電、装飾品、生活用品など幅広い分野で使用されており、岡山市北区のオーエム産業(株)は、国内外の大学や研究機関とも協力し、めっき加工の新技術を追求している。2003年に3代目社長となって約20年、難波圭太郎氏に同社の特色と目指す企業像などについて話を聞いた。



聞き手・執筆
井ノ上美恵子
(フリーアナウンサー)

自動車から電子部品へ 新しい技術を求めて挑戦

オーエム産業(株)は、1943年に日興電化工業(株)としてめっき加工を工業に難波氏の祖父が創業、第二次世界大戦中は飛行機や船舶部品のめっき加工を請け負っていた。岡山市大供(当時)にあった工場と事務所は岡山空襲で焼失、戦後は場所を移し事業を再開する。自動車部品製造、めっき加工、建材製造の3部門で事業を展開し、1970年にめっき加工事業を分社したのがオーエム産業(株)である。

部品へと広がったことが転機となった。電子部品は今でこそ最先端であるが、当時は安価で他社があまり手を出さない分野であった。しかし、同社は早くから県工業試験場(現・県工業技術センター)との共同研究などに取り組み、高めてきた技術力が業績を伸ばしていく。

中でも鉛を使わないはんだめっき加工では、トラブルのもとになる皮膜表面のウイスカー(ひげ状の金属結晶)の発生を抑える独自の技術が、2004年に「岡山・わが社の技」に認定された。この画期的な開発は環境にも優しく、顧客にも喜ばれ受注の増加につながった。

このほかにも国内外の大学や研究機関との共同研究により、「ものづくり日本大賞優秀賞」や「おかやま産学官連携大賞」を受賞するなど、高い評価を得る開発が続いた。現在も岡山大学、岡山県立大学、関東学院大学、東京大学などの共同研究に取り組んでいる。

社員の成長へ手厚い支援

こうした研究開発に積極的な社風の素地は、20年ほど前のドイツの研究視察などによって築かれた。表面工学の世界的な第一人者である関東学院大学の教授に同行したところ、海外では博士の肩書は絶大で、最先端の研究所をすみずみまで丁寧に案内してもらえたことに驚いたという。

教授から「こういう人材育成もある」と教えられる、開発部門のエースだった係長を関東学院大学大学院(修士課程)に送り出す。給料、学費、住居費等の会社負担はもとより、開発現場のエースが不在となることの技術力低下を覚悟のうえでの試みであった。

結果、開発係長は2年後会社に復帰し、研究を続けながら博士号を取得、「岡山・わが社の技」の認定を受けた技術開発などに力を発揮することとなった。同社では現在、入社後に博士号を取得した4人を含め5人の博士が在籍している。

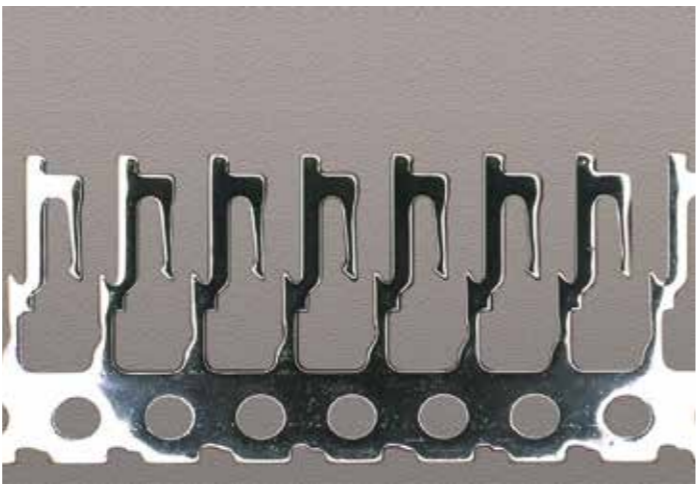
技術者の育成だけでなく、近年はTPM(全員参加の生産保全・生産経営)やトヨタ生産方式を中心に、社員教育にも力を注いできた。そして、全体を俯瞰して見ることが出来る人材が育ってきたことから、2019年にはめっき加工ラインごとの事業部制を導入、顧客との交渉から受注・メンテナンスや品質管理などをそれぞれのグループで行うことで、顧客対応など業務にス

明日を拓く企業の戦略

成長する企業には独自の戦略がある。企業の今を、そしてこれからを創るその戦略に迫る



研究室・試作室・表面改質室・環境試験室を併せ持つ表面処理研究所。技術提案型企業として最先端のめっき加工技術の研究と開発に取り組み次世代の技術開発を目指す



鉛を使わず皮膜表面にウイスカー(ひげ状の金属結晶)が発生しないよう独自に開発したウイスカーフリー鉛フリーはんだめっき加工技術。環境対応性も高く2004年に「岡山・わが社の技」に認定された



8社が集まり開催される企業対抗ソフトボール大会。みんなでワイワイ楽しみたいという想いから始めた。他社社長からは、「スポーツを通じて交流するなかで、自分の会社しか知らなかった社員が少し外向きになった」と評判



難波圭太郎氏は大学卒業後、大手自動車部品メーカーで4年間勤務。2000年にオーエム産業に入社。2003年1月から3代目社長に就任。大学時代に阪神淡路大震災で被災した経験を持つ。このことから、大事なことは人と人の繋がりであり、やるべきことは明日でなく今日やろうと考えるようになったと言っ



本社 岡山市北区野田3丁目18番48号
事業内容 自動車、電子部品などのめっき加工
代表者 難波圭太郎
設立 昭和45年(1970年)
資本金 2,000万円

グループ企業共同で 新たな取り組みへ

2013年には表面処理研究所を開所、さらに研究開発に力を入れた。電子部品で使用される金めっき加工の代替加工などで使われる「モノクリスタルスズめっき加工」の事業化で会社の認知度が上がる。これをきっかけに、大手企業や首都圏の企業にも引けを取らないほどに開発・製品化の依頼が入るようになった。

また、約50年前に分社されて以降、別々の道を歩んできたグループ企業の「人と技術」を再結晶化できないかと考え、2018年からグループ企業の技術開発に携わるメンバーが毎月1回集まり、「開発交流会を開いている。

メンバーの自己紹介に始まり、技術の実証実験の相互依頼などを経て、近年、連携することから生まれる新たな発想をもつて、「One OM」で商品を作り出そうというレベルに発展してきた。現在はオーエム機器(株)の主力製品にあたるOAFフロアパネルに、オーエム産業(株)でめっき加工を施すヒーターフロアの共同開発に取り組んでいる。

さまざまな産業から高度な技術が求められるめっき加工。難波氏は「めっきのことならオーエムの〇〇さんに聞くといいよ、そう言ってもらえる社員がもっと増えたらと思っています」と笑う。